

家の集などいひて歌よむ人こそかきとどむることなれ、これはゆめ
ゆめさにはあらず。ただあはれにも悲しくもなにとなく忘れがたく
おぼゆることどもの、そのをりをりふと心におぼえしを、思ひ出で
らるるままに、わが目ひとつにみむとて書きおくなり。

われならで誰かあはれとみづくきのあともし末の世にのこるとも

高倉の院の御位のころ、承安四年などいひしとしにや、正月一日中
宮の御方へ内のうへわたらせ給へりし御引直衣の御姿、宮の御もの
のぐめしたりし御さまなどの、いつと申しながらめもあやにみえさ
せ給ひしを、物のとほりより見まゐらせて、心におもひしこと。

雲の上にかかる月日のひかりみる身のちぎりさへ嬉しとぞ思ふ

同じ春なりしにや、建春門院内裏にしばしさぶらはせおはしましし
が、この御方へいらせおはしまして、八条の二位殿御まゐりありし
も御所にさぶらはせ給ひしを、みくしげ殿の御うしろよりおつおつ

○みづくき一筆跡。「あはれと見」の「見」と懸けている。

○高倉の院一八十代高倉天皇。仁安三年御即位、養和元年崩御、御寿二十一。

○中宮一御名徳子、平清盛女。

○中宮の御方へ一この時の内裏は、閑院内裏である。

○御もののぐ一御盛装の意。弁内侍日記上、「摂政殿参らせ給ひて、御ぐしそがせおはしますに、もののぐにて参るべき由仰せありしかば、折しも押し出しの衣用意なき由申して。」もののぐ装束の時は糊のきいた打衣をつける。

○物のとほり一廊下などのことか。建春門院中納言日記、「少納言といふ老尼の、かたはらいたしと思ひて、とほりに立ちて招き騒ぎしがをかしけれど。」

○建春門院一後白河天皇の女御、高倉天皇の御生母。御名滋子。平時信女。

○八条二位 清盛の妻時子。建春門院の御姉。
○みくしげ殿一平家公達草紙によれば太政大臣藤原伊通の女。
○女院一建春門院。

○さねむね一西園寺実宗。按察大納言公通の子。嘉応二年藏人頭、安元二年参議。琵琶を妙音院師長に学び名手の聞えがあった

ちと見まゐらせしかば、女院紫のにほひの御衣、山吹の御表着、桜の御小袿、あを色の御唐衣、てふをいろいろに織りたりしをめしたりしかば、いふかたなくめでたく若くもおはします。宮はつぼめる色の紅梅の御衣、かば桜の御うはぎ、柳の御小袿、あか色の御唐衣、皆桜を織りたるめしたりし、にほひあひて今更めづらしくいふかたなく見えさせ給ひしに、大方の御所の御しつらひ、人々の姿、ことにかがやくばかり見えしをり、心にかくおぼえし。

春の花秋のつき夜をおなじをり見るこちする雲の上かな
頭中将さねむね、常に中宮の御方へまゐりて、琵琶ひき歌うたひあそびて、時々ことひけなどいはれしを、ことさましにこそとのみ申してすぎしに、あるをり文のやうにてただかく書きておこせたり。

松風のひびきもそへぬひとりごとはさのみつれなきねをやつくさむ

返し